

No.124

大学生のキャリア形成・ライフコース意識の構造
——平成 29 年度「地域調査実習 I」調査 B のデータに基づく——

高嶋裕一

2017 年 9 月 13 日

大学生のキャリア形成・ライフコース意識の構造

－平成29年度「地域調査実習I」調査Bのデータに基づく－

高嶋裕一* †

平成29年9月13日

概要

本稿は平成29年度地域調査実習Iの調査結果データに依拠して、大学生のキャリア形成とライフコース意識の全体構造をデータマイニング的手法により明らかにすることを意図したものである。

本稿の研究動機は以下のとおりである。すなわち、A) 今後の日本社会の姿、とりわけ人口動態の趨勢を予測するための手段として、現在の大学生のライフコースにかかわる意識の包括的把握を試みること、B) 大学生自身のキャリア形成意識に対する親・家族との関係、自身の家族形成についての意向の影響を定量的に把握すること、C) 大学生を被験者とする意識調査データとその分析事例を蓄積することにより、体系的な調査データ活用の仕組みを構築する一助とすること、である。

本稿の結論は以下のとおりである。すなわち、a) 今後の人口動態への示唆についていえば、バランスのとれた人生への主体的関心が持てるかどうか、家族形成の願望につながる鍵となる。ただしその願望はあくまでも伝統的結婚観に依拠したものであり、男女間で共通に支持されるものではない。なお、伝統的結婚観と伝統的家族観は同一のものではないことに留意する必要がある。b) 家族関係がキャリア形成に深い影響を与えていることが定量的に把握された。特に相談相手として家族を選ぶかキャリアセンターを選ぶかは両極をなしている。c) 分析事例の蓄積についていえば、同一データに複数の分析方法を適用することは有益である。

目次

1	はじめに	1
2	データの概要と主要な分析方法	2
3	Part 1 の分析	2
4	Part 2 の分析	5
5	属性変数の分析	8
6	全体の分析	9
7	結論と今後の課題	12
A	今後のキャリア形成支援策への示唆	15

1 はじめに

本稿は、平成29年度地域調査実習Iの調査結果データに依拠して大学生のキャリア形成とライフコース意識の全体構造をデータマイニング的手法により明らかにすることを意図したものである。

本稿の研究動機は以下のとおりである。すなわち、

- 人口動態研究に資するため。本稿は「ライフコース」を、個人生活(個人のキャリアパス)に関わる考え方と次世代の生活(家族形成)に関わる考え方を総合したものと捉える。今後の日本社会の姿、とりわけ人口動態の趨勢を予測するための手段として、現在の大学生のライフコースについての意識を包括的に把握することは重要である。
- 高等教育の中で若年者へのキャリア形成支援を行うことの意義を明らかにするため。とりわけ大学生自身のキャリア形成意識に対して、親・家

*岩手県立大学総合政策学部

†調査データの活用に関して、本学 宇佐美誠史講師、太田陽之助手、東北大学 鈴木伸生氏より多大な便宜をいただいた。ここに謝して記したい。

族との関係、自身の家族形成についての意向が重要な影響を与えていることが経験的に知られているが、定量的には把握されていなかった。これを明らかにすることによりキャリア形成支援における有効かつ新しい支援策を打ち出すことが期待できる。

- c). 大学生を被験者とする意識調査データとその分析事例を蓄積することにより、体系的な調査データ活用の仕組みを構築する一助とすること。実習データは毎年のように蓄積されており、これらについて複数の研究者がそれぞれ独自の観点から研究することが大学の研究組織としての進歩に役立つと期待される。

本稿の構成は以下のとおりである。第2節にデータの概要と主要な分析方法を示す。第3節で Part 1(ライフコース)に関わる設問の、第4節で Part2(就職意識)に関わる設問の分析を行う。第5節で調査全体を対象とした分析を行う。第5節で結論と今後の研究課題を提示する。

2 データの概要と主要な分析方法

2017年度地域調査実習¹⁾において、「大学生の生活と意識に関する調査(B票)」が2017年6月に総合政策学部学生1年生～3年生を対象として実施された。調査状況は表1のとおりである。調査票は、「ライフコース」をテーマとする問1、「就職意識」をテーマとする問2、および回答者属性Fから構成されている。

主な分析方法として、ここでは特定の統計的仮説を前提としないデータマイニング的なアプローチをとる。設問数が比較的大きいことから、第一にVARCLUS(斜交因子分析の枠組みによる変数分類)を用いた因子の識別、第二に因子スコアと属性変数を用いたグラフィカル・モデリングを活用して全体像を描く。VARCLUSの詳細については高嶋[2012c]を参照されたい。

¹⁾総合政策学部における実習科目の一つ。

²⁾具体的には、「1. 多趣味である」「2. ひとつの趣味に力を注いでいる」を異なる趣味傾向と捉え、それぞれダミー変数とした。「3. 趣味はない」はいずれの変数にも反応しなかった場合とした。

³⁾具体的には、「1. 家族」「2. 友人」を異なるダミー変数に割り当て、それ以外をいずれのダミー変数でも反応しなかった場合として一括した。

⁴⁾具体的には、「1. 結婚後もずっと仕事を続けてほしい」と「2. 結婚したらすぐに仕事をやめ、ずっと家庭に入ってほしい」/3. 子供が生まれたら仕事をやめ、ずっと家庭に入ってほしい/4. 子供が生まれたら仕事をやめ、子供の成長後、フルタイムで仕事に復帰してほしい/5. 子供が生まれたら仕事をやめ、子供の成長後、パートタイムで仕事に復帰してほしい」をそれぞれ異なるダミー変数に割り当て、それ以外をいずれのダミー変数でも反応しなかった場合として一括した。

表 1: 標本数

学年	標本数	調査対象履修クラス
1年	57	社会学
2年	42	社会調査法 I
3年以上	52	キャリアデザイン II
合計	151	

3 Part 1 の分析

Part1は主にライフコースに関わる設問から成る。分析に用いた設問のリストは表4を参照のこと。

データは次のように加工した。特に断らない限り、設問は原則としてリッカート尺度による量的変数として取り扱った。量的変数として解釈することが難しい設問(具体的には、Q1-6:趣味傾向²⁾、Q1-11:人生設計の相談相手³⁾、Q1-21:配偶者就業への考え⁴⁾)は複数のダミー変数の組み合わせとして処理した。設問 Q1-1(出身高校が共学であるか)は回答者の大半が共学であったため分析には用いなかった。Q1-14(交際相手に求めるもの)と Q1-16(結婚相手に求めるもの)は交際経験、結婚意思の有無に依存するため分析に用いなかった。自由記述の設問も分析に用いなかった。

表 2: Part1 の VARCLUS 処理結果

Cl	C-Var	E-Var	Prop	2nd E
1	5	3.262	0.652	0.786
2	5	2.481	0.496	0.848
3	3	1.821	0.607	0.980
4	2	1.718	0.859	0.282
5	5	1.909	0.382	0.966
6	3	1.655	0.552	0.784
7	2	1.683	0.841	0.317
8	3	1.542	0.514	0.963

Total variation explained =16.07 (28)

Proportion = 0.574

表 2 は Part 1 の設問全体を VARCLUS で分類した

結果である。8つのクラスター(因子)が識別されている。データの全変動は設問数に等しい28であり、そのうちの57.4%の変動が説明されている。C-Varはクラスター毎の全変動(やはり設問数に等しい)であり、E-

Varは説明された変動(最大固有値に等しい)、Propは寄与率である。2nd Eは2番目に大きい固有値であり、これが1.0を下回っていることはKeiser基準でさらなるクラスター分割が不可能であることを示している。

表 3: Part1 の因子=クラスター間相関行列

	1	2	3	4	5	6	7	8
1	1.000	0.189	-0.009	-0.004	-0.268	0.061	0.250	-0.052
2	0.189	1.000	-0.075	0.152	-0.092	0.223	0.270	-0.021
3	-0.009	-0.075	1.000	0.082	-0.026	-0.053	0.007	-0.132
4	-0.004	0.152	0.082	1.000	0.182	0.120	0.074	-0.016
5	-0.268	-0.092	-0.026	0.182	1.000	0.018	-0.073	-0.143
6	0.061	0.223	-0.053	0.120	0.018	1.000	0.098	0.111
7	0.250	0.270	0.007	0.074	-0.073	0.098	1.000	0.007
8	-0.052	-0.021	-0.132	-0.016	-0.143	0.111	0.007	1.000

表 4: Part1 の VARCLUS による変数分類

Cl	Var	Own Cl	Next Cl	Ratio	Desc	Coefficients
1	q1_7_1	0.533	0.014	0.474	重視度: 大学生生活	-0.224
	q1_7_2	0.657	0.040	0.357	重視度: 就職	-0.249
	q1_7_3	0.719	0.255	0.377	重視度: 結婚	-0.260
	q1_7_4	0.748	0.155	0.299	重視度: 育児	-0.265
	q1_7_5	0.604	0.055	0.419	重視度: 老後	-0.238
2	q1_19_1	0.614	0.060	0.410	結婚観: 夫婦別姓	0.316
	q1_19_2	0.711	0.088	0.317	結婚観: 別居婚	0.340
	q1_19_3	0.560	0.046	0.462	結婚観: 契約婚	0.302
	q1_19_4	0.355	0.042	0.674	結婚観: 同性婚	0.240
	q1_20	0.241	0.008	0.765	結婚法整備	0.198
3	q1_4	0.096	0.019	0.922	親友の有無	0.170
	q1_11_1	0.828	0.010	0.174	人生設計の相談: 家族	0.499
	q1_11_2	0.898	0.014	0.103	人生設計の相談: 友人	-0.520
4	q1_6_1	0.859	0.042	0.147	趣味傾向: 多趣味	-0.539
	q1_6_2	0.859	0.027	0.145	趣味傾向: 集中	0.539
5	q1_8	0.313	0.037	0.713	ワークライフバランス	0.293
	q1_9	0.628	0.056	0.394	人生設計	0.415
	q1_10	0.652	0.044	0.364	人生目標への努力	0.423
	q1_12	0.104	0.008	0.903	大学サポートへの満足	-0.169
	q1_13	0.212	0.021	0.805	交際経験	0.241
6	q1_18	0.412	0.034	0.609	家庭分業	-0.388
	q1_21_1	0.633	0.021	0.374	配偶者就業: 続けて	-0.481
	q1_21_2	0.610	0.034	0.404	配偶者就業: やめて	0.472
7	q1_15	0.841	0.065	0.170	結婚希望	-0.545
	q1_17	0.841	0.069	0.170	子供希望	0.545
8	q1_2	0.736	0.032	0.272	両親干渉(高校)	0.556
	q1_3	0.689	0.019	0.317	両親干渉(大学)	0.538
	q1_5	0.116	0.027	0.908	ボランティア経験	-0.221

表3は因子間相関行列である。VARCLUSは斜交因子分析の一種であるため、因子間相関行列はこのように単位行列にならない。

表4はVARCLUSによって分類された各クラスターのプロフィールを示したものである。以下、クラスター毎にその特徴・解釈を示す。

- CL1-1 : Q1-7の各枝問が単一のクラスターに分類されている。Q1-7は各ライフステージ(大学生活、就職、結婚、育児、老後)のそれぞれを「どのくらい重視しているか」を問うており、「1. 重視する」～「4. 重視しない」の4段階で評価されている。Coefficients(標準スコアリング係数または因子負荷量)はすべて負で絶対値が互いにほぼ同等である。このことから、このクラスター全体として、自己のライフステージへの主体的な関心度を示すものと言える。このスコア値が高いほど自己の人生に強い関心を持っていることをあらわす。また、各ライフステージが別々ではなくひとまとまりのクラスターに分類されていることは、各ステージが相互に区別されていないことをあらわす。
- CL1-2 : Q1-19とQ1-20が同じクラスターとして分類されている。Q1-19は各種の非伝統的な結婚の形態への賛否を問うたものであり、「1. 賛成」～「4. 反対」の4段階で評価されている。Q1-20はそれら非伝統的な結婚形態の法制化に対する賛否を問うたものであり、「1. 必要だと思う」～「4. 必要だと思わない」の4段階で評価されている。Coefficientsはいずれも正であり、このことからこの因子のスコア値が高い場合、非伝統的な結婚形態に反対する傾向が強いことを示す。
- CL1-3 : Q1-4とQ1-11が同じクラスターとして分類されている。Q1-4は「真剣な話のできる友人」の有無を問うており、「1. いる」、「2. いない」の2択となっている。Q1-11は「自分の人生設計を相談する相手」を問うたものであり、1が「家族」、2が「友人」を指す。このクラスターは総体として家族に頼るか友人に頼るかを両極とする相談相手の選択傾向を示す。このスコア値が高い場合、友人ではなく家族を頼りにする傾向が強いことを示す。
- CL1-4 : Q1-6の二つの設問が単一のクラスターとして分類されている。Q1-6は趣味の傾向を問うもので、

1は「多趣味である」、2は「ひとつの趣味に力を注いでいる」を指す。Coefficientsの符号は互いに逆であり、関心の対象が広がるか、深く追求するかの傾向の違いを示す。このスコア値が高い場合、より深く集中する傾向を持っている。

- CL1-5 : Q1-8、Q1-9、Q1-10、Q1-12、Q1-13が単一のクラスターに分類されている。Q1-8は「仕事とプライベートどちらをより重視したいか」を問うもので、「1. 仕事」～「5. プライベート」の5段階で評価されている。Q1-9、Q1-10は人生設計の見通しを持っているか/そのために努力しているかを問うもので、「1. あてはまる」～「4. あてはまらない」の4段階で評価されている。Q1-12は大学サポートセンターによる支援への満足度を問うたものであり、「1. 満足している」～「4. 満足していない」の4段階で評価されている。Q1-13は交際経験の有無であり、「1. あり」、「2. なし」の2択である。このクラスターは全体として人生の目標を意識的に追求しているかどうかを示すものであり、このスコア値が低いほど人生設計や仕事に対して前向き(積極的)であると解釈できる。交際経験も人生設計の一部を構成していることは興味深い。
- CL1-6 : Q1-18とQ1-21が単一のクラスターとして分類されている。Q1-18は「夫が外で働き、妻は家庭を守るべき」という考え方への賛否を問うもので、「1. 賛成」～「4. 反対」の4段階で評価されている。Q1-21は配偶者が働くことについての考え方を問うたものであり、1は「続けてほしい」、2は「辞めてほしい」を指す。CoefficientsはQ1-21-2のみが正であり、このクラスター総体として伝統的な家族観への賛否を示す。このスコア値が高いほど、伝統的家族観を強く支持している。
- CL1-7 : Q1-15とQ1-17が単一のクラスターとして分類されている。Q1-15は結婚の意向を問うたもので、「1. 結婚したい」、「2. 結婚するつもりはない」の2択である。Q1-17は希望する子供の数であり、ほしくない場合は「0」である。CoefficientsはQ1-15が負、Q1-17が正であり、このクラスター総体として子供も含めた家族形成への願望を示す。このスコア値が高い場合、家族形成への願望が強いことを示している。
- CL1-8 : Q1-2、Q1-3、Q1-5が単一のクラスターとして分

類されている。Q1-2は高校選択での、Q1-3は大学選択での両親の干渉度合いを示したものであり、「1. かなり干渉した」～「4. まったく干渉しなかった」の4段階で評価されている。Q1-5は自らの意思でのボランティア経験の有無を問うたものであり、「1. ある」、「2. ない」の2択である。CoefficientsはQ1-5のみ負であり、このスコア値が高いほど自分の意思で自分の行動を決定できたことを示す。

4 Part 2の分析

Part2は主に就業意識に関わる設問から成る。分析に用いた設問のリストは表7を参照のこと。

データはPart1と同様、断らない限りリッカート尺度による量的変数として扱った。Q2-9、Q2-10、Q2-12、Q2-13、Q2-14は回答者が限定されているために分析対象から除外した⁵。Q2-2(就活開始時期)は、「2年後期」以前を一括して「1」、それ以外⁶を「2」とリコードした。

表5はPart2の設問をVARCLUSによって分類した結果である。全45変数が12のクラスター(因子)に分割されている。またこれにより全変動の63.7%が説明されている。表6に因子間相関行列を示す。

表 5: Part2 の VARCLUS 処理結果

Cl	C-Var	E-Var	Prop	2nd E
1	11	10.985	0.999	0.004
2	5	2.662	0.532	0.874
3	4	2.024	0.506	0.920
4	4	2.022	0.506	0.852
5	2	1.316	0.658	0.684
6	5	1.985	0.397	0.949
7	3	1.480	0.493	0.792
8	2	1.208	0.604	0.792
9	3	1.368	0.456	0.925
10	2	1.194	0.597	0.806
11	2	1.161	0.580	0.839
12	2	1.243	0.621	0.757

Total variation explained =28.65 (45)

Proportion = 0.6366

表7はVARCLUSによって分割された12個のクラスターのプロフィールである。それぞれのクラスターの解釈は以下のとおりである。

CL2-1: Q2-4の各枝問が単一のクラスターとして分類されている。Q2-4は希望業種を複数回答で問うたものである。Coefficientsはすべて正で絶対値も等しく、業種の違いは特に区別されていない。このクラスターは全体として希望業種の多さを示し、このスコア値が高いほど様々な業種に関心がある(関心を絞りきれていない)ことを示す。

表 6: Part2 の因子=クラスター間相関行列

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1	1.000	-0.029	0.027	0.041	-0.061	0.121	-0.089	0.062	-0.076	0.050	-0.050	-0.064
2	-0.029	1.000	0.010	0.066	0.116	-0.333	0.146	0.055	0.236	-0.250	-0.108	-0.087
3	0.027	0.010	1.000	0.262	-0.196	0.058	-0.283	0.008	-0.101	-0.088	-0.089	0.191
4	0.041	0.066	0.262	1.000	-0.114	0.186	-0.054	0.069	0.144	-0.093	-0.130	0.073
5	-0.061	0.116	-0.196	-0.114	1.000	-0.335	0.265	0.210	0.296	0.160	0.070	-0.180
6	0.121	-0.333	0.058	0.186	-0.335	1.000	-0.279	-0.145	-0.108	0.211	0.073	0.051
7	-0.089	0.146	-0.283	-0.054	0.265	-0.279	1.000	0.046	0.202	-0.183	0.085	-0.277
8	0.062	0.055	0.008	0.069	0.210	-0.145	0.046	1.000	0.208	0.239	0.056	-0.173
9	-0.076	0.236	-0.101	0.144	0.296	-0.108	0.202	0.208	1.000	0.159	0.184	-0.127
10	0.050	-0.250	-0.088	-0.093	0.160	0.211	-0.183	0.239	0.159	1.000	0.124	0.010
11	-0.050	-0.108	-0.089	-0.130	0.070	0.073	0.085	0.056	0.184	0.124	1.000	-0.078
12	-0.064	-0.087	0.191	0.073	-0.180	0.051	-0.277	-0.173	-0.127	0.010	-0.078	1.000

⁵ これらの設問はキャリア教育を受けたことを前提とするものである。

⁶ 「まだ考えていない」を含む。

表 7: Part2 の VARCLUS による変数分類

Cl	Var	Own Cl	Next Cl	Ratio	Desc	Coefficients
1	q2_4_1	0.999	0.016	0.001	希望業種: 農業	0.091
	q2_4_2	0.998	0.016	0.002	希望業種: 卸売・小売	0.091
	q2_4_3	0.999	0.015	0.001	希望業種: 建設・製造	0.091
	q2_4_4	0.999	0.014	0.001	希望業種: 飲食・宿泊	0.091
	q2_4_5	0.997	0.014	0.003	希望業種: 金融・保険	0.091
	q2_4_6	1.000	0.014	0.000	希望業種: 医療・福祉	0.091
	q2_4_7	0.999	0.014	0.001	希望業種: 電気・ガス	0.091
	q2_4_8	0.999	0.015	0.001	希望業種: 教育	0.091
	q2_4_9	0.999	0.015	0.001	希望業種: 通信・運輸	0.091
	q2_4_10	0.997	0.012	0.003	希望業種: 公務	0.091
	q2_4_11	0.999	0.016	0.001	希望業種: その他	0.091
2	q2_8a	0.701	0.072	0.323	インターン: マナー	-0.314
	q2_8b	0.602	0.073	0.429	インターン: コミュニケーション	-0.292
	q2_8c	0.459	0.053	0.571	インターン: 業界知識	-0.254
	q2_8d	0.649	0.094	0.387	インターン: 責任感	-0.303
	q2_11	0.251	0.080	0.814	キャリアへの積極性	-0.188
3	q2_15b	0.193	0.064	0.862	大学生生活: サークル	0.217
	q2_16a	0.739	0.096	0.289	性格: 積極性	0.425
	q2_16b	0.696	0.105	0.339	性格: 社交的	0.412
	q2_16f	0.396	0.022	0.617	性格: 意思表示しない	-0.311
4	q2_16c	0.604	0.122	0.451	性格: 臨機応変	0.384
	q2_16d	0.521	0.017	0.488	性格: 洞察力	0.357
	q2_16g	0.290	0.039	0.738	性格: 独創的	0.266
	q2_16i	0.607	0.040	0.410	性格: 回転が早い	0.385
5	q2_15e	0.658	0.100	0.380	大学生生活: アルバイト	-0.616
	q2_15f	0.658	0.229	0.444	大学生生活: 資格	-0.616
6	q2_1	0.484	0.063	0.550	就職を意識	0.351
	q2_3	0.407	0.056	0.629	就職先情報	0.321
	q2_15g	0.562	0.184	0.538	大学生生活: 就職情報	0.378
	q2_16e	0.287	0.058	0.757	性格: 計画性	0.270
	q2_2	0.246	0.031	0.779	就活開始時期	0.250
7	q2_5	0.496	0.078	0.547	就職相談	-0.476
	q2_7	0.530	0.022	0.481	インターン希望	-0.492
	q2_16j	0.454	0.104	0.610	性格: 協力的	-0.455
8	q2_6_3	0.604	0.024	0.406	相談相手: 先生	0.643
	q2_15a	0.604	0.062	0.422	大学生生活: 勉強・研究	-0.643
9	q2_6_4	0.341	0.072	0.711	相談相手: 友人	0.427
	q2_15d	0.606	0.105	0.440	大学生生活: 人間関係	-0.569
	q2_16k	0.421	0.025	0.594	性格: 悩みがち	-0.475
10	q2_15c	0.597	0.063	0.430	大学生生活: 趣味	-0.647
	q2_16h	0.597	0.041	0.420	性格: 飽きっぽい	-0.647
11	q2_6_2	0.580	0.024	0.430	相談相手: 親戚	0.656
	q2_6_6	0.580	0.043	0.438	相談相手: 知人	0.656
12	q2_6_1	0.621	0.024	0.388	相談相手: 家族	-0.634
	q2_6_5	0.621	0.100	0.421	相談相手: キャリアセンター	0.634

- CL2-2 : Q2-8 と Q2-11 が単一のクラスターとして分類されている。Q2-8 はインターンシップへの参加によって期待される効果を表し、「1. 身についた(身につく)」～「4. 身につけていない(身につかない)」の4段階で評価されている。Q2-11 はキャリア教育によって得られる積極性の度合いを示し、「1. 積極的になった」～「5. 消極的になった」の5段階で評価されている。総じてこのクラスターはインターンシップ(キャリア教育)への評価または期待度を示し、Coefficients がすべて負であることから、このスコア値が高いほどインターンシップへの期待度が高いことが分かる。
- CL2-3 : Q15-b と Q16-a、b、f が単一のクラスターとして分類されている。Q15-b は大学生活の中で「サークル」を重視する度合いを示しており、「1. 重点をおいている」～「4. 重点をおいていない」の4段階で評価されている。Q16 は性格についての自己診断を示しており、a は「積極性」、b は「社会的」、f は「意思表示しない」を示す。いずれも「1. あてはまる」～「4. あてはまらない」の4段階で評価されている。Coefficients は Q16-f 以外は正であり、全体としてグループ活動への積極性を示す。このスコア値が低いほどグループ活動に積極的であると言える。
- CL2-4 : Q16-c、d、g、i が単一のクラスターとして分類されている。いずれも性格に関わる設問で、c が「臨機応変」、d が「洞察力」、g が「独創性」、i が「頭の回転が早い」である。Coefficients はすべて正であり、総体として工夫することへの意欲・能力の度合いを示す。このスコア値が低いほど工夫することへの意欲・能力が高いと言える。
- CL2-5 : Q15-e と f が単一のクラスターとして分類されている。大学生活で「アルバイト」と「資格取得」を重視する度合いを示す。いずれの Coefficients も負であり、このスコア値が高いほどアルバイトや資格取得に積極的であることを示す。
- CL2-6 : Q2-1、Q2-3、Q2-15g、Q2-16e、Q2-2 が単一のクラスターとして分類されている。Q2-1 は日常での就職の意識の度合いを示し、「1. とても意識している」～「4. まったく意識していない」の4段階で評価されている。Q2-3 は就職先の情報を集めているかどうかを示し、「1. はい」、「2. いいえ」の2択である。Q2-15g は大学生活で就職のための情報収集を重視しているかどうかを指す。Q2-16e は性格のうち「計画性」を表す。Q2-2 は就活の開始時期であり、「1. 2年後期以前」、「2. それ以降/考えていない」である。すべての Coefficients は正であり、総体として就職意識の強さを示す。このスコア値が低いほど就活をより強く意識していると言える。
- CL2-7 : Q2-5、Q2-7、Q2-16j が単一のクラスターとして分類されている。Q2-5 は就職相談の有無であり、「1. はい」、「2. いいえ」の2択である。Q2-7 はインターンシップ参加経験またはその意向であり、「1. はい」、「2. この先参加する予定である」、「3. 参加予定はない」の3段階評価である。Q2-16j は性格のうち「協力的」を指す。総じて、キャリア支援活動への参加度合いを示し、Coefficients がすべて負であることから、このスコア値が高いほどキャリア支援活動への参加に積極的であると言える。
- CL2-8 : Q2-6-3、Q2-15a が単一のクラスターとして分類されている。Q2-6-3 は就職相談の相手として学校の先生を選ぶ傾向、Q2-15a は大学生活で勉強・研究を重視する度合いを表す。Coefficients は Q2-6-3 が正、Q2-15a が負であり、このスコア値が高いほど、勉強を重視し、相談相手として教師を頼る傾向を表す。
- CL2-9 : Q2-6-4、Q2-15d、Q2-16k が単一のクラスターとして分類されている。Q2-6-4 は進路の相談相手に友人を選ぶ傾向、Q2-15d は大学生活で「人間関係」を重視する度合い、Q2-16k は性格で「悩みがち」であることを表す。Coefficients は Q2-6-4 を除き負である。このスコア値が低いほど、友人との人間関係を重視する傾向が強い。
- CL2-10 : Q2-15c、Q2-16h が単一のクラスターとして分類されている。Q2-15c は大学生活で「趣味」を重視する度合い、Q2-16h は性格で「飽きっぽさ」を示す。このクラスター総体として、忍耐度や集中度の低さを示す。Coefficients はいずれも負であり、このスコア値が高いほど、飽きっぽく、趣味に走りやすいことを表す。
- CL2-11 : Q2-6-2、Q2-6-6 が単一のクラスターとして分類されている。それぞれ進路相談相手に「親戚」、「知人」を選ぶ傾向を示している。Coefficients はいずれも正であり、このスコア値が高いほど、家族でもなく友人でもない第三者を相談相手に選ぶ傾向が強いと言える。

CL2-12 : Q2-6-1、Q2-6-5 が単一のクラスターとして分類されている。それぞれ進路相談相手に「家族」、「キャリアセンター」を選ぶ傾向を示している。Coefficients は互いに逆符号であり、「家族」と「キャリアセンター」が対極的に認知されていることがわかる。このスコア値が高い場合、家族ではなくキャリアセンターを相談相手に選ぶ傾向が強い。

5 属性変数の分析

他の変数と同様に属性変数についても VARCLUS による分類を試みる。

データは次のように加工した。F3(履修モデル)は(地域系モデルを基準とする) カテゴリー変数として取り扱った。F4(出身地)について岩手県内陸を1、沿岸を2とするダミー変数の組み合わせとして表現した。F6(高校時の同居家族)はカテゴリー変数として取り扱った。F7(現在の居住形態)は、実家を1、それ以外を0とするダミー変数とした。それ以外の変数はすべてそのまま量的変数として扱った。

表8は性別・学年を除く属性変数を VARCLUS によって分類した結果である。全19変数が7つのクラスター(因子)に分割されている。またこれにより全変動の54.3%が説明されている。表9は因子間相関行列である。

表8: 属性変数の VARCLUS 処理結果

Cl	C-Var	E-Var	Prop	2nd E
1	2	1.644	0.822	0.356
2	4	1.842	0.461	0.976
3	2	1.322	0.661	0.678
4	3	1.426	0.475	0.955
5	3	1.280	0.427	0.920
6	2	1.288	0.644	0.712
7	3	1.513	0.504	0.896

Total variation explained =10.31 (19)
Proportion = 0.5428

表10は VARCLUS によって分割された7個のクラスターのプロフィールである。それぞれのクラスターの解釈は以下のとおりである。

CLF-1 : F6-3、F6-4 が単一のクラスターとして分類されている。F6-3 は祖父との、F6-4 は祖母との同居

を示すダミー変数であり、Coefficients はいずれも正である。このクラスターは全体として高校時代の祖父母との同居を示し、このスコア値が高いほど祖父母と同居していたことを示す。

CLF-2 : F4-1、F4-2、F7、F8A が単一のクラスターとして分類されている。F4-1、F4-2 は出身が岩手県内陸であるか沿岸であるか、F7 は現在実家にいるかどうか、F8 は授業聴講にかかる時間の多さを表す。F4-1 と F4-2 の Coefficients の符号は逆であり、これらが対極の性質をもつことを示す。また F4-1(内陸)に反応する場合は高い確率で F7(実家)にも反応している。F8A の Coefficients は負である。総合して、このスコア値が低いほど、沿岸よりは内陸を出身地としており、現在も実家にいる可能性が高く、授業聴講にかかる時間が多。

CLF-3 : F8D、F9 が単一のクラスターとして分類されている。F8D はアルバイトに費やす時間、F9 は自由に使えるお金を表す。Coefficients はいずれも正であり、このスコア値が高いほど、アルバイトに多くの時間を費やし、また、使えるお金が多いことを示している。

CLF-4 : F3-1、F3-3、F6-2 が単一のクラスターとして分類されている。F3-1、F3-3 はそれぞれ行政系、環境系へ配属されていること、またはその希望をもっていることを示す。Coefficients は互いに符号が逆であり、これらが対極の性質をもつことを示している。F6-2 は高校時代に母と同居していることを示し、履修配属希望が高校時代の母の影響を強く受けていることを示唆している。このスコア値が高いほど、高校時代に母と同居しており、行政系モデルへの配属を希望する可能性が高いことを示す。

CLF-5 : F6-1、F6-5、F8C が単一のクラスターとして分類されている。F6-1、F6-5 はそれぞれ高校時代に父、兄弟姉妹と同居していたことを表す。F8C はサークル活動などにかかる時間を表す。高校時代に母以外の家族との接触が多いかがどうか、サークル活動に取り組む意欲に影響していると解釈される。Coefficients はすべて正であり、このスコア値が高いほど、高校時代に父、兄弟姉妹と同居しており、サークル活動にかかる時間が多。

表 9: 属性変数の因子=クラスター間相関行列

	1	2	3	4	5	6	7
1	1.000	0.048	-0.085	-0.124	0.014	-0.154	0.209
2	0.048	1.000	0.067	0.033	0.119	-0.204	0.006
3	-0.085	0.067	1.000	0.015	-0.042	0.041	-0.217
4	-0.124	0.033	0.015	1.000	0.164	-0.031	-0.068
5	0.014	0.119	-0.042	0.164	1.000	-0.083	-0.053
6	-0.154	-0.204	0.041	-0.031	-0.083	1.000	-0.041
7	0.209	0.006	-0.217	-0.068	-0.053	-0.041	1.000

表 10: 属性変数の VARCLUS による変数分類

Cl	Var	Own Cl	Next Cl	Ratio	Desc	Coefficients
1	f6_3	0.822	0.020	0.182	同居:祖父	0.552
	f6_4	0.822	0.057	0.189	同居:祖母	0.552
2	f4_1	0.708	0.007	0.294	出身:岩手内陸	-0.457
	f4_2	0.485	0.040	0.537	出身:岩手沿岸	0.378
	f7	0.571	0.079	0.466	実家	-0.410
	f8A	0.078	0.015	0.936	時間:授業	-0.151
3	f8D	0.661	0.042	0.354	時間:アルバイト	0.615
	f9	0.661	0.026	0.348	自由に使えるお金	0.615
4	f3_1	0.546	0.058	0.482	モデル:行政系	0.518
	f3_3	0.670	0.023	0.338	モデル:環境系	-0.574
	f6_2	0.210	0.069	0.848	同居:母	0.321
5	f6_1	0.488	0.056	0.542	同居:父	0.546
	f6_5	0.505	0.014	0.502	同居:兄弟姉妹	0.555
	f8C	0.287	0.045	0.747	時間:サークル	0.419
6	f3_2	0.644	0.012	0.360	モデル:経営系	0.623
	f5	0.644	0.047	0.374	都市/田舎	-0.623
7	f8B	0.279	0.047	0.757	時間:予習・資格	0.349
	f8E	0.579	0.081	0.459	時間:友人	-0.503
	f8F	0.655	0.007	0.347	時間:趣味	-0.535

CLF-6 : F3-2、F5 が単一のクラスターとして分類されている。F3-2 は履修モデルで経営系を選択した、あるいは志望していることを示す。F5 は自分が出身地を都会と認識しているか田舎と認識しているかを示し、「1. 都市部」～「4. 田舎」の4段階で評価したものである。Coefficients は F3-2 が正、F5 が負であり、このスコア値が高いほど、出身地を都会と認識し、経営系を志望する確率が高くなる。

CLF-7 : F8B、F8E、F8F が単一のクラスターとして分類されている。いずれも大学生生活で費やす時間であり、それぞれ予習・資格、友人とのつきあい、趣味にかかる時間を表す。Coefficients は F8B を

除き負であり、このスコア値が高いほど予習や資格取得などの自己研鑽に時間をかけ、友人とのつきあいや趣味にかかる時間を削減する。

属性変数全体として、高校時代の同居家族の構成が大学時代のモデル選択などの進路や時間の使い方に強い影響を及ぼしていることがわかり、興味深い。

6 全体の分析

調査データ全体を、Part 1、Part 2、属性変数別に VARCLUS で分類し、結果的に解釈の妥当な幾つかの因子に縮約することができた。

- 就活意識 (CL2-6) は学年進行 (F2) のほか、インターンシップ期待 (CL2-2)、行政系 (CLF-4)、アルバイト (CLF-3) と関係する。学年進行にともない就活意識が増大するのは当然のこととして、行政系で就活意識が高いのは、公務員試験スケジュールと民間企業採用スケジュールとの兼ね合いに悩むからと推察される。就活時期が意識されるにつれて、アルバイトに費やす時間は削減される。また就活意識が高いほど、インターンシップへの期待は大きくなる。

7 結論と今後の課題

分析の結果、以下のことが明らかとなった。

- 調査結果から得られた 92(=28+45+19) の設問を 27(=8+12+7) のクラスター (因子) に縮約した。縮約された各因子の解釈が容易であるという意味で、この変数縮約の結果は概ね妥当である。例えば、CL1-2(伝統的結婚観) のように互いに類似する設問が単一のクラスターを形成している。
- ただし、同系統の設問が別々のクラスターに分類される場合もある。例えば Part 2 の Q2-16(自己評価された性格) の各枝間は別々のクラスターに分類されている。「性格」と表現すると個人に生得的な性質のような印象を受けるが、実際には普段の行動との関係性が強い、という意味でもともと「性格」とひとまとめにすることが不当であるとも解釈できる。例えば CL2-3(サークル) のように、サークル活動に熱心であるから社交的になるのか、社交的であるからサークル活動に熱心であるのかは区別できない⁸。
- 属性変数の分類からは、高校時代の同居家族構成や居住環境がモデル選択 (すなわち学内の進路選択) に影響を与えていることが確認できる。CLF-4 では行政系/環境系の選択に母親の影響が伺え、CLF-6 では周囲が都会的雰囲気であったかどうかが経営系の選択に影響を与えているように見える。
- 後半では因子間の関係に着目した全体分析を試みた。しかし、縮約したとはいえ 27 変数を網羅するモデルは十分に複雑であり、そのため変数を

制約しつつ分析せざるを得なかった。それでも以下のように幾つか興味深い知見が得られた。

- 伝統的家族観・結婚観については男女差が大きい。つまり、男性は伝統的観点を支持、女性は否定する傾向が強い。
- 学年進行にともない、予習や資格取得のための自己研鑽の時間が減少する。この時間はアルバイトやインターンシップのための時間増にあてられるようである。アルバイトとインターンシップは活動時間を互いに取り合っている。
- 学年進行はサークル活動の時間も減少させる。低学年ではサークル、高学年ではアルバイトというように使い分けされている。サークルにおいては 3 年生以降で引退して次の学年への代替わりが進むのに対して、アルバイトでは指導的な立場からなかなか抜け出せないという現実がある。
- 自己研鑽の時間が増えるかどうかは、業種の絞り込みができていくかどうか依存している。そのため、早めに業種とは何か、それを身近に (主体的に) 考える機会を検討する必要がある。
- キャリアセンターへの相談はインターンシップ等への参加と代替的となっている。自分でインターンシップに参加する学生とキャリアセンターへの相談に向かう学生はタイプが異なるようである。

本稿の目的との関係では次のことが言える。

- 今後の人口動態への示唆: バランスのとれた人生への主体的関心が持てるかどうか、家族形成の願望につながる鍵となる。ただしその願望はあくまでも伝統的結婚観に依拠したものであり、男女間で共通に支持されるものではない。また、家族形成願望はサークル活動への熱心さと関連している。出会いの場としてサークルがある程度重視されていると言える。なお、伝統的結婚観と伝統的家族観は同一のものではない (直接の関連性を持たない) ことに留意する必要がある。
- キャリア形成支援への示唆: 家族関係がキャリア形成に深い影響を与えていることが定量的に把

⁸また、性向の違いが行動・意識と相互作用するという認識が、我々が今日「就業力 = 社会人基礎力」の強化に取り組む背景にある、とも言える。

握された。特に相談相手として家族を選ぶかキャリアセンターを選ぶかは両極をなしている。今後のキャリア形成支援において家族を巻き込むことが重視されよう。

c). 分析事例の蓄積：同一データに複数の分析方法を適用することは有益である。ここでは鈴木伸生(2017)と本稿との関係を整理しておく。

- 鈴木は作業仮説として、1) 性別役割分業意識が高いほど、また結婚の新制度整備が不要な人ほど、契約婚に賛成する、2) 交際経験がないほど契約婚に賛成する、を提示し、これらを二項ロジットモデルによって推定している。鈴木の結果は1) について、前半は支持、後半は不支持、2) について支持というものであった。
- 鈴木の結果について、本稿の結果からは次のように解釈できる。1) について、本稿では契約婚は他の結婚形態と合わせて単一のクラスターを形成しており、契約婚単独で分析できていない、という難点がある⁹。その難点を割り引いた上で解釈するならば、前半について CL1-2(伝統的結婚観) と CL1-6(伝統的家族観) は性別を媒介項として近い関係(みかけの相関)にあり、鈴木の結果はもっともらしいと言える。後半について、CL1-2の標準化スコアリング係数が同符号であることから、契約婚は新制度の一種であり、それを支持する回答者が制度化を必要としているのも頷ける。
- 2) について、交際経験は CL1-5(人生設計への積極性)の中に一括されてしまっているが、CL1-1、CL1-7を媒介として関連性が見られる、という意味で鈴木の結果を裏付けることができる。

参考文献

- [1] 岩手県立大学総合政策学部地域系履修モデル、地域調査実習Ⅰ発表会報告集、2017年7月28日
- [2] 鈴木伸生、多変量解析分析例2 誰が契約婚に賛成するのか？ - 岩手県立大学総合政策学部生を対象として計量的実証研究、2017年7月28日

- [3] 高嶋裕一、コンピテンシーと地域志向 - 学生の就職希望地選択に着目して -、2016年8月18日、岩手県立大学総合政策学会 Working Paper Series No.116
- [4] 高嶋裕一、「大学モデル」の諸類型と地域貢献の理論 - 大学の公益性に着目して -、2007年7月10日、岩手県立大学総合政策学会 Working Paper Series No.38
- [5] 岩手県立大学総合政策学部就業力育成委員会、大学生の就業力尺度の計測と分析 - IPU E-MAPの事例 -、2011年5月30日、岩手県立大学総合政策学会 Working Paper Series No.65
- [6] 岩手県立大学総合政策学部就業力育成委員会、就業力尺度 IPU E-MAP を用いた学生集団評価 - 就業力育成のための基礎分析として -、2011年12月19日、岩手県立大学総合政策学会 Working Paper Series No.74
- [7] 岩手県立大学総合政策学部就業力育成委員会、就業力尺度 IPU E-MAP を用いた学生集団評価 - 2011年後期の分析 -、2012年2月21日、岩手県立大学総合政策学会 Working Paper Series No.77
- [8] 岩手県立大学総合政策学部就業力育成委員会、就業力尺度 IPU E-MAP を用いた学生集団評価 - 2011年~2012年前期の分析 -、2012年7月25日、岩手県立大学総合政策学会 Working Paper Series No.82
- [9] 高嶋裕一、SAS VARCLUS プロシジャの R への移植、2012年9月5日、岩手県立大学総合政策学会 Working Paper Series No.85
- [10] 高嶋裕一、項目反応理論による就業力尺度の分析 - IPU E-MAP データを対象として、2013年1月18日、岩手県立大学総合政策学会 Working Paper Series No.89
- [11] 岩手県立大学総合政策学部就業力育成委員会、2013年度前期 IPU E-MAP 報告、2013年9月30日、岩手県立大学総合政策学会 Working Paper Series No.94
- [12] 高嶋裕一、二つの就業力計測テストの比較について - PROG と E-map の比較を例として -、2013年3月17日、岩手県立大学総合政策学会 Working Paper Series No.104
- [13] 高嶋裕一、就業力計測テストにおけるワーディングの工夫について - E-map の設問見直しへの示

⁹反面、回答者にとって契約婚は他の結婚形態とあまり区別されていないのではないかとも思われる。

峻一、2013年3月17日、岩手県立大学総合政策
学会 Working Paper Series No.105

- [14] 高嶋裕一、集団の就業力計測スコアの要因分析
について - PROG テストを対象とした属性要因
分解 -、2013年3月24日、岩手県立大学総合政
策学会 Working Paper Series No.107

A 今後のキャリア形成支援策への示唆

以下に本分析から示唆される大学が実施すべき今後のキャリア形成支援策を述べる。

早い学年での業種絞り込みを促す施策

業種の絞り込みができていない、つまり自分のゴールを決めかねている段階では資格取得などの自己研鑽に主体的に取り組めない、ということが本分析から示唆された¹⁰。大学の学業も広い意味で自己研鑽の枠内に入るのだとすれば、早い時期から学生が進路を探索することを手助けすることが本学にとって大きな利益となる。

業種の絞り込みができないのは、業種とは何か、自分とそれら業種との接点があるのかを掴めていないことを意味する。したがって、様々な業種・職種との接点を持つ機会を入学直後(たとえば、基礎教養入門における共通授業)から設けるべきである。

具体的には、1) 職業レディネス・テストの実施とその解説、結果に基づく簡単なグループワークをセットにした授業、2) 幾つかの業種の実態について、視聴覚教材を用いた視聴と、その結果に基づく簡単なグループワークをセットにした授業、などが考えられる。これらは全学生が共通に受講するべきものとして、学部の必修科目の中で行われることが望ましい(選択の基盤科目や授業外のガイダンスでは限界がある)。

インターンシップの意義付を明確にする施策

本学部において、インターンシップを単位化しているが、卒業要件には入れておらず、卒業要件化をめぐる賛否両論が拮抗している。卒業要件化への反対論の最大のもは、「ほかの専門科目での卒業単位が足りないところを、インターンシップの単位によって充足してしまおうとする傾向(もしあれば)を助長する」、「単位取得のための安易なインターンシップがはびこり、協力企業に多大な迷惑をかける」、といったものである。

本分析では、インターンシップがキャリア形成支援のなかで重要な位置づけを占めていること、と同時にアルバイトなどと対抗関係にあることが示唆されてい

る。反面、学業への注力はアルバイトと対抗関係にはあるものの、学生のキャリア形成の中において重要な位置を占めているとはいえない(図2のCL2-8)。この現状は望ましいものではなく、またインターンシップの位置づけを替えない限りは改善することも難しい。

アルバイトがキャリア形成、とりわけ就業力の強化に役だっていることは、「Eマップ」のエビデンス・シートの内容からも読み取れる。学生の強みとしてアルバイトで独自の工夫を行った経験やそれが周囲から評価された経験などである。また職場での人間関係をハンドリングする能力の向上に確かにアルバイトでの上司や同僚・後輩との関係が寄与している。ただし、このような体験は大学組織の手の及ぶ範囲をまったく超えている。ブラックバイト等の問題が生じたとしても、事後的に相談を受けはじめて知り得る。

インターンシップは、よりよくコントロールされた環境下での就業体験を通じて就業力強化をはかる方策と言える。インターンシップをアルバイトと比較するならば、本来はより強い大学の関与の下で就業体験を充実できるはずである。これが卒業要件化されていないのは、みすみすインターンシップをアルバイトと同じ位置づけに落とし込んでいることに等しい。また、大学の関与があるならばこそ、就業体験と専門教育を結びつける可能性が拓かれる。

「単位取得のための安易なインターンシップがはびこる」といった懸念は、本分析からは示唆されない。逆に成績付与と単位認定基準を充実化することにより、インターンシップへの主体的な取り組みがより強化されるものと考えられる。

キャリアセンターの相談業務にかかわる施策

キャリアセンターへの相談と家族への相談は対抗的であること、つまり進路相談を行う学生は、キャリアセンターか、家族かのどちらか一方をとる傾向にあることが分析結果から示唆されている。

しかし、学生にとって本来はキャリアセンター、家族の双方にバランスよく相談するほうが望ましいはずである。キャリアセンターは多くの相談事例を蓄積しており、またその時々の人事情報、求人情勢を家族よりは的確に掴んでいる。家族はその学生個人の性格や特質をキャリアセンターよりは身近に把握しており、ま

¹⁰また経験的にも、自分が将来何をしたら良いかわからない、という学生の声は頻りに聞く。

たその学生個人のために時間をとって相談できる。片方にしか相談しないのは合理的な行動とは言えない。

このような現状を改善するための行動計画がキャリアセンターを中心として学生支援グループの中で議論されるべきである。確かに、オープンキャンパスなどの機会を用いた保証人との相談会が設けられているが、チャンネルとしては細い。後援会組織などを通じた定期

的な働きかけが必要である。

また学生自身がせっぱつまってからキャリアセンターに相談するのではなく、相談が歓迎されていること、どういった場合にとくに相談に来るべきかをとりわけ低学年の学生に伝える必要がある。(現行の「学生便覧」ではキャリアセンターの紹介が「就職」の項目に含まれ、低学年の学生には読まれない可能性が高い。)

An analysis of the aspirations of the young people about their career development and course of life

– based on the results from the survey B in "Field Survey Exercise I" (June, 2017) –

Yuichi Takashima

Faculty of Policy Studies, Iwate Prefectural University

2017.9.13

Abstarct

This paper aims to find a whole structure of the aspirations of the university students about their career development and course of life using data-mining methodologies.

Motive and backgrounds in this paper are as follows. A) It is important to make clear how the youth feel and think about their own life course and career path, because we can foresee the future population dynamics of Japanese society from those survey. B) To study empirically how the aspirations of the youth about their own career are affected by their parents and family members. C) To accumulate the case of analysis of attitude survey targeted the youth, in order to construct the system for reusing many survey results conducted in our University.

This paper finds following results. a) As for the future population dynamics, the aspiration of the youth for making their own family is related to their subjective and well balanced concern about their own life stages. However, such an aspiration is based on the preference about traditional marriages, and will not be accepted by female students. Here, it should be noted that, the preference for the traditional marriage is not identical with the preference for the traditional division of labor by gender role. b) We found empirically that the family of students have the fundamental influence on their own career developments. In particular, Their family and the university officials for employment support are rival advisers for their career development. c) We found it is useful to accumulate the results of different methods with same data.